夕焼け通信1293号　2021.2.1

〒690-0823　島根県松江市西川津町4276-B402
miyaken@me.com　gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/
編集 宮森健次

専業ババ奮闘記（その２）39

木幡智恵美

出産（6）

娘が第三子を産んで四日目は土曜日。実歩の産前休暇の際もだったが、産休に入ってからの土曜日は子どもたちを保育所に連れて行っていない。いつもよりはゆったりした時間が流れていく。朝食の準備をし、義母の身の回りの世話をしてから孫たちと一緒に朝食を摂る。

義母をデイサービスに送り、寛大と実歩を連れてお母ちゃんと弟に会いに行った。実歩も、「おかあちゃあん」号泣騒動があってからはすんなりお母ちゃんに近づいていく。初めてしっかりと目を開けている赤ん坊を見た。忠ちゃんのお母さんによく似ている。名前はまだ確定ではないが、宗矢になりそうだ。寛大も実歩もウ冠の漢字で始まる。前にウ冠の漢字をずらり並べた紙を持ってきて、「どの字がいいと思う?」と聞かれた。字、宣、宅、宙、家などなど。なかなかぴたっと来るものがない。一番名前に使われていそうなのが宗だった。男だと宗徳、宗幸、女だったら、宗子、宗美…。「寛大みたいに三音がいいに」と言うので、「男の子だったら宗斗（しゅうと）は?」と言ったが、却下された。名付けるのは娘たち夫婦だ。宗矢か。ちと言いにくいが、宗ちゃんなら言いやすいかも。

産院を出てから、夫の運転で寛大と実歩を原子力館に連れて行った。思う存分遊ばせてから、帰って昼食。二人とも、親子丼をおかわりして食べた。

明日の日曜日、娘と赤ん坊は退院だ。忠ちゃんは、仕事を終えると寛大と実歩をうちに迎えに来て家に連れ帰り、一晩過ごすという。そして、日曜日は父子で娘と赤ん坊を病院に迎えに行き、夕食前に母子四人を我が家へ連れてくるとのこと。約一日、私は自由の身になる。束の間の休息だ。

夕食は寛大の好きなビビンバにした。やはりおかわりをした。食事が終わった頃、忠ちゃんが迎えに来た。

久々にゆったりした夜を過ごす。焼酎のお湯割りをちびりちびりやりながら、ためていた録画を見る。疲れているせいか、すぐに酔いが回った。明日からは、赤ん坊の世話も加わる。出産祝いにちょっとした膳も準備もしなければ。今夜はしっかり眠っておこう。

宮森健次

思い出話

講演後しばらくして、聴講職員のメッセージ集をもらった。表紙に花束をあしらった折り紙が貼られていて、一足早く退職日を迎えたような格好だが、中身も外見もこしらえるのにかかっただろう手間暇を思い、ぼくのために時間を割いてもらったんだと申し訳なく思った。

講演やら公演、研修後のアンケートがどうも苦手だ。何を書いていいやらさっぱり思いつかず、しどろもどろでいるうちに時間が来ることの繰り返し。だから強制されない限り書かない。そういえば読書感想文がそうだった。読んだ、その満足感ですべてだ。言葉を添える必要がどこにあるのかまったくわからないから、いやでいやでしかたがなかった。

話の中身は何でもいいと言われていたが、図書館研修とうたわれていたので、本と関係する話を選んだ。自分のしたこと、見たこと以外を話すつもりはなかったので、これまで県内各所暮らした先での出会いやら出来事を本でつないでみた。物を使って来し方を振り返ってみるなどということをしたことがなかったので、改めて読んだ物にせよ書いた物にせよ、つなぎつながれ、飛ばし飛ばされして我が身の今を作っているものよと思えて、自分でこねくり回しているのと楽しかった。

散らかった話になってしまうのと、自分がいやだからという理由で、職員に感想を書いてもらうなど滅相もないとは思うものの、そんなことをくどくどしく言うのも野暮ったく、企画職員にお任せしていたら、件のプレゼントとなった。

無理して感謝なんぞ書いてあったらまた自分を苛むことになるぞと思いつつ読んでみると、けっこうな人が自分の思い出話を書いていたのでほっとした。ぼくの話を聞きながら自分の過去がよみがえってきたらしい。そんなことをねらってはいなかったが、愚かしくも懸命にしていたその時々のことを話せば、聴者の同じような体験が掘り起こされるのだろう。話した甲斐があったというものだ。本で言えば、行間を読むことと同じだから。

言うまでもないことだが、だれだって生活の苦労はある。教職員であれば、子ども、保護者、同僚との間での喜怒哀楽は、日々数え切れない。そんな痛かったり痒かったりを「聞いてください」と書いてある。おうおう、聞きますよ、聞きますとも。こんなことでもなければお互い知らなかった話、もっと早くにするべきだったなあ。

気がついたときには、もう後がない。でも後があるときは、気づけない。

ニュース日記　771

中村　礼治

民主主義の不具合

30代フリーター　やあ、ジイさん。バイデンの米大統領就任を報じた朝日新聞は「民主主義　立て直す時」の見出しを掲げ、「シンクタンク『V-Dem』によると、民主的な国・地域の数は2019年に87と、権威主義体制の数（92）を18年ぶりに下回った」と世界の民主主義の現状を伝えている（1月22日朝刊）。

年金生活者　その数字の裏に世界の民主化の進展を阻む要因が隠れているとしたら、国民のふところが温まるにつれて独裁を強める中国の振る舞い方にそれをうかがうことができる。

　改革開放による中国の資本主義化は当初、政治の民主化を促すと期待された。現実は逆だった。経済成長によって生活が向上し、消費の自由を手にした国民は、そのぶん政治的な自由への希求を低下させ、それが独裁を容認する要因のひとつとなった。

　かつての第2次産業中心の産業資本主義の時代なら、経済成長は労働者の生活の向上にあまりつながらず、それがロシアやドイツで独裁を打倒する革命に労働者を立ち上がらせた。

　第3次産業が中心の現在の資本主義はITをはじめとするテクノロジーの飛躍的な発達に支えられて富の稀少性の縮減を加速し、国民の生活を向上させた。中国の経済発展はその軌道を進んだ。

30代　民主主義が後退する時代に世界は入ったのか。

年金　民主主義の機能のひとつは、富の再分配を平等に近づけることであり、もうひとつは、それでも平等にはならない現実を理念によって埋め合わせることにある。

　前者の機能は多数決原理を指す。富の分配を市場にまかせると、少数者に集中しやすい。それを再分配して多数者にできるだけ行き渡るようにするのがこの原理だ。しかし、それを徹底すると、市場が機能しなくなり、生産も流通も停滞する。それで困窮するのは多数者だ。

　だから、不平等は不可避となる。だが、それに平気でいられる人間は少ない。それをなだめるのが、民主主義の掲げる「法の下の平等」という理念にほかならない。それは現実の不平等をなくしはしないが、代わりに理念としての平等を人びとに与える。

　民主主義はそれ自体が目的ではなく、人間の自由を拡張するための手段として生まれた。それは少数者しか手にできなかった消費の自由を、富の再分配によって多数者に与えることができる。

　だが、その自由は富の集中する少数者にくらべればはるかに小さい。民主制はそうした限定付きの自由を理念としての自由、すなわち「自由な投票」によって補う仕組みでもある。現実の不平等を理念としての平等によって埋め合わせているように。

30代　その仕組みが危うくなっている。

年金　もし今あげたような民主主義の機能を代替するものが出現すれば、民主主義はその必要度を低下させる。民主化どころか独裁を強化している中国はその典型だ。

　インターネットはそうした民主主義の機能を代替するもののひとつに数えることができる。サイバー空間では種々のサービスの低価格化、無料化が進み、富者と貧者の格差がそのぶん縮んでいる。消費の自由はインターネットがなかった時代に比べるとはるかに広がった。

　その広がりは言い換えると、利便性の享受の拡大だ。サイバー空間での利便性の享受は個人情報の提供を対価としている。その利便性は個人情報の集積によって生み出されるものだからだ。

　プライバシーの保護を無視し得る独裁国家は、個人情報の集積が民主主義国より容易であり、中国の国民はサイバー空間での利便性を欧米や日本よりも多く享受している可能性がある。つまりそれだけ自由とも言える。

30代　民主主義の危うさは米大統領選でもあらわになった。トランプの残した最大のレガシーは、陰謀論を振りかざすリーダーが大勢に支持され、政治権力を握る政治的土壌がアメリカに豊かに存在することを明らかにしたことにある、と鈴木一人という国際政治学者が指摘していた（「トランプ時代の政治とは何だったのか」、The Asahi Shimbun GLOBE+、1月20日）

年金　東西冷戦の終結で資本主義対社会主義という「大きな物語」が終わった現在の世界で、それに代わる「小さな物語」のひとつとしてアメリカを中心に勢いづいているのが陰謀論だ。

　冷戦で勝利した資本主義はテクノロジーの発達に支えられて高度化し、人類史を支配してきた富の稀少性をかつてない速度で縮減しつつある。その結果、先進諸国では家計に占める選択的消費が必需的消費を上回り、それが国家から個人への権力の分散を駆動した。

　権力を手にした諸個人はそれに相応する処遇を求めるようになる。だが、同時に広がった格差のせいで、その要求を満たすことのできない層が出現する。その中から、自分たちの不遇を巨大な闇の力のせいと考える陰謀論を信じる者も生まれる。

　それを原動力のひとつとして大統領になったトランプは任期の最後に、大統領選で大がかりな不正があったとする陰謀論を繰り返し、それを信じる支持者による連邦議会の占拠を誘発した。そんな大統領に7400万人もが投票したという実績は、トランプ後も陰謀論が勢いを保ち続ける道を開いたと言える。